北海道のヒグマ事件 ～ヒグマとの共生はどうするか～

会報・ホームページ委員　藤永　誠一郎

① ヒグマの現状

近年、ヒグマの目撃情報や被害を報じるニュースを目にすることが多くなったと感じる人は多いのではないでしょうか。札幌市では公式ＬＩＮＥにおいて「ヒグマ出没情報」を配信していますが、毎日のようにヒグマの目撃情報等が配信されてきます。２０２３年（令和５年）の札幌市のヒグマ出没情報は、目撃と痕跡を含め、合計２２７件となっており、なかでも南区は１５６件と突出しています。

なぜヒグマの出没が多くなってきたのでしょうか。北海道ではこれまで３０年以上にわたって、ヒグマの保護を重視した政策を進めてきました。ヒグマの生息域が減って、絶滅の恐れがあったためです。道が残雪期に奨励した「春グマ駆除（比較的安全な冬眠明けのヒグマの駆除）」も１９９０年に廃止され、箱罠による捕獲が推奨されるようになりました。１９９０年度における道のヒグマ生息数の推計が中央値で５，２００頭であったのに対し、２０２０度には１１，７００頭と推定、１９９０年度と比較すれば倍増しており、さらに増加傾向にあるとみられます。

実は北海道は世界でもっとも熊害（ユウガイ）事件が多発する地域であり、ヒグマと人間が高い密度で共生するという、世界でも珍しいといえる地域です。相次ぐヒグマによる被害を受け、道もこれまでの政策を転換し、２０２３年からは春先の残雪期にヒグマを駆除する「春期管理捕獲」と喚ばれる制度を新たに導入することを決めました。環境省はヒグマとツキノワグマを「指定管理鳥獣」に追加し、「保護」から「管理」へと政策を転換、国の専門家などによる検討会は、法律で禁止される市街地や住宅地での猟銃の使用について、クマによる被害が出る恐れがある場合などは警察官の指示がなくても特例的に可能とする方針案をとりまとめました。

② ヒグマの生態

そもそもヒグマとはどのような動物なのでしょうか。

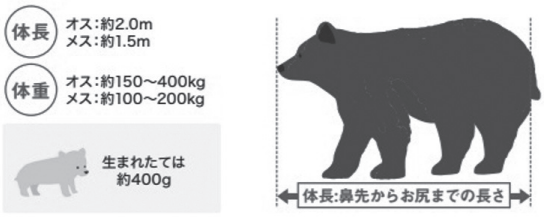
現在世界では７種のクマ類（ジャイアントパンダ亜科であるジャイアントパンダを入れれば８種）が生息しています。「ホッキョクグマ」、「ヒグマ」、「アメリカクロクマ」、「ツキノワグマ」、「ナマケグマ」、「マレーグマ」、「メガネグマ」です。そのうち、日本では「ヒグマ」と「ツキノワグマ」の２種が生息しており、北海道の約５５％の地域にヒグマが、本州の４５％の地域にツキノワグマが生息していると言われます。

ヒグマの特徴としては、体長はオスで約２メートル、メスで約１．５メートル、体重はオスが約１５０～４００㎏、メスは約１００～２００㎏、走る速さは時速５０キロを超えます。

特別企画 バックナンバーはコチラ

昼夜に関係なく行動でき、鼻がよくきくため数10メートル先の匂いを嗅ぎ分けます。耳も良いので音に対しては非常に敏感で、通常、人がクマに気づく前にクマの方が先に人に気づきます。群れを作らず単独もしくは親子で行動し、非常に警戒心が強い動物です。12月から2月は冬眠穴で飲まず食わずで過ごし、母グマは1、2月頃に子グマを産んで授乳します。3～5月頃には冬眠から覚めて、穴の近くで過ごすようになります。雪解けが早い人里近くの山菜を食べにくる時期です。6～8月は、オスはメスを求めて広範囲を歩き回り、親離れをした若いクマが分散する時期でもあり、市街地に出没することが増えます。9～11月は冬眠に備えてドングリなどの木の実を食べて体重を増やします。

成獣となったヒグマは4～6歳から子を産み始め、一度に1～3頭の子を産みます。ヒグマの寿命は20～30年程度とされていますが、野生の捕獲個体での最長寿記録は知床で捕殺された34歳のオスのヒグマです。



ヒグマの大きさ（さっぽろヒグマ基本計画2023資料より）

3 クマによる被害（近年のヒグマ出没事例）

環境省によると、クマ類（ヒグマ・ツキノワグマ）による人身被害は2023年度4月から11月末までに193件発生し、被害人数は212人（うち死亡6人）でした。月別の統計がある2006年度以降において、発生件数は最多です。北海道では2023年度のヒグマによる人身被害は6件（死亡者2名、負傷者7名、計9名）となっています。

では、近年世間を騒がせたヒグマによる事件をいくつかご紹介します。

（1）2021年6月　札幌市東区

札幌市での熊害事件としては、150年近く前の「丘珠事件（明治11年）」が有名です。札幌市の都市の特徴として、農地をつぶして市街地が形成されたということもあり、住宅街と山林が直接面しているということが特徴となります。この特徴もあって、札幌市ではヒグマの目撃情報や市街地への侵入が多い要因ともなっています。

2021年6月18日午前3時半頃、札幌市東区北31条東19丁目の路上でヒグマが通行人に目撃され警察に通報、東区内で出没が相次ぎ、同日午前5時55分、ゴミ出しをしていた70代男性、午前6時15分には同じくゴミ出しをしていた80代女性、午前7時18分には路上を歩いていた40代男性、午前7時58分には陸上自衛隊丘珠駐屯地の40代男性自衛官が襲われました。午前8時05分にはヒグマは丘珠空港に侵入し、午前11時16分に猟友会のハンターが駆除しています。早朝の市街地をヒグマが疾走し、人を襲う映像がニュースでも流れ、衝撃を与えました。幸い襲われた方々に命の別状はありませんでした。

山のない東区でのヒグマの出没は極めてまれなことです。この事件でのヒグマは当別町方面の山間部から石狩川を渡り、川や水路を伝って市街地まで入ってきた可能性が高いと言われています。クマが出没した地域はいずれも住宅密集地で猟銃による発砲は不可能であり、丘珠空港北側にある畑に囲まれた茂みに入っていったことが、駆除を可能にしました。また、夜間ではなく昼間の明るい時間帯であったことも幸いしました。万一丘珠空港方面ではなく中心部方面へ逃走した場合、対処することが困難であったことは想像に難くありません。

（2）2023年5月　朱鞠内湖

朱鞠内湖は雨竜第一ダムの完成により生じた幌加内町にある人造湖です。森に囲まれ、入り組んだ湖岸がフィヨルドのような地形となり、大小の島々が点在する天然の湖のように見える非常に美しい湖です。1974年には朱鞠内湖道立自然公園に指定されています。また、幻の魚と言われる「イトウ」がまれに釣れることもあって、釣り人の憧れの場所であり、北海道のキャンパーの聖地とも言われます。

2023年5月14日午前10時頃、釣りをしにきた男性が行方不明になったとガイドが警察に通報しました。朱鞠内湖ではこれまで熊害が報告されたことはありませんでしたが、過去30年間でヒグマの推定生息数が4倍超にも増加したとされています。警察に通報したガイドが胴付き長靴をくわえているクマを目撃していたこともあり、管轄の士別

署はハンターらと現場付近を捜索しましたが日暮れとともに打ち切り。翌15日は天候不良により士別署は捜索を中止しましたが、幌加内町は事態が急を要するとして道の協力のもとドローンを飛ばし、地元猟友会や漁協の協力を得て捜索隊を編成して現場に向かいました。午後2時15分頃に遺体の一部を発見、午後3時30分頃現場付近をうろつくクマを発見し、ハンターが駆除しました。

加害グマは推定3歳、推定体重は120kg、体長162センチのオスでした。被害者の男性は釣りのベテランで、10年ほど朱鞠内湖に通っていたとのことで、クマの怖さもしっかり理解していたはずです。また、男性が襲われたと思われる場所は、森林から少なくとも数10メートルは離れた見通しの良い水辺だったとみられます。クマが森林を出て自ら男性に接近した可能性があり、本来警戒心が強く人との接近を避ける傾向があるクマとしては珍しい行動をとった、非常にまれなケースとも指摘されます。

ヒグマが人を襲う類型としては3つに大別されます。①防衛のための攻撃（急に遭遇して驚いての行動や、子グマを守ろうとする行動）、②積極的な攻撃（生ゴミをあさるなど、食べ物を手に入れる目的での行動）、③好奇心で接近して攻撃、の3つであり、朱鞠内湖での事件は③に該当するのではないかとみられています。

（3）2019年7月～2023年7月　標茶町～釧路町

通称「OSO18（オソジュウハチ）」を聞いたことがある人も多いと思います。標茶町オソツベツの牧場で、放牧中の乳牛1頭がヒグマに襲われたことを皮切りに、計66頭もの牛が襲われました。「OSO18」というのは、オソツベツのオソと、現場に残された前足の幅が18センチ（後に下方修正）であったことから付けられた名前です。1頭のクマがこれほどの数の牛を襲った記録はかつてありません。被害が甚大だったにも関わらず非常に警戒心が強く学習能力の高い個体であり、道はOSO対策本部を発足させて捕獲・駆除に尽力しましたが、ついに捕獲・駆除はできませんでした。OSO18は「忍者グマ」と呼ばれ、オソが寿命で死ぬまで被害が続くのではないかという悲観論も出ていました。

そんななか、OSO18の最期は意外にもあっさりと迎えることになります。2023年8月22日、釧路総合振興局が、釧路町で7月30日に駆除されたヒグマがDNA鑑定の結果OSO18であったことが確認されたと発表。駆除したのは釧路町の職員であるハンターで、これまで被害が出ていた場所からは南に10キロほども離れていました。駆除したハンターはヒグマをオソであるとは思わず、死骸は釧路管内の食肉処理業者に運ばれ、体毛によるDNA鑑定の結果、OSO18と確認されました。確認されたのは駆除から2週間以上も後のことで、肉は東京のジビエ料理店で提供されていたこともニュースとなりました。

ヒグマは本来植物や木の実などを主食とする動物で、OSO18のように肉食化するケースは珍しいと言われます。エゾシカが増加して山中の草木が食い荒らされ、食べ物が少なくなったクマがエゾシカなどの死体を食べるようになり、そこからエゾシカを襲うようになって、肉の味を覚えたクマがさらには牛も襲うようになったとも考えられます。肉食化するケースが増加していくと、OSO18のようなケースが今後増える可能性も想定されます。

④ 三毛別（さんけべつ）ヒグマ事件

北海道の開拓時代、開拓民たちはしばしばヒグマの脅威にさらされました。ヒグマによる人や家畜への被害は数多くありますが、熊害史上世界にも例がないと言われる最悪のヒグマ事件が、1915年（大正4年）の暮に苫前村（現在の苫前町）で起こった「三毛別ヒグマ事件」です。

事件が起こったのは1915年12月9日から同月14日、北海道苫前村三毛別の奥地の六線沢という開拓集落です。苫前村の中心地からは30キロほど離れている山奥の地域で、ヒグマが開拓民の家を襲撃し、死者は7人、負傷者は3人という、甚大な被害が出ました。

開拓民の集落を最初にヒグマが襲撃をしたのは12月9日でした。当時の集落では12月になれば一面雪の下になっており、河川の通行はできない状況になっています。開拓民たちは氷橋（スガバシ）という、川に丸太を並べた上にエゾマツなどの枝や葉を敷き詰め、さらには雪などで踏みしめ凍らせて橋を作るという作業をすることが、重要な恒例作業となっていました。

三毛別羆事件復元地
（当時の住居と襲撃するヒグマ）

苫前町郷土資料館（ヒグマの襲撃の再現）

開拓民の家からは男たちがこの氷橋を作る共同作業にかり出されており、開拓民の一人である太田三郎も参加していました。太田家には子どもがいなく、家には内妻のマユと、預かり子である幹雄（当時６歳）がいました。他に寄宿人である長松要吉がいましたが、要吉は朝から裏山に木の伐採に出かけており不在。昼食を食べるために要吉が家に戻ったところ、家の中が静まりかえっており、囲炉裏の片隅で幹雄が前屈みに座り込んでいます。要吉が不審に思って近づくと、幹雄の喉はえぐられ側頭部には穴が開き、すでに亡くなっていました。

開拓民たちがすぐに集まってきて調べたところ、クマの襲撃によるものであること、マユはクマにその場で一部食害されたうえ、窓からそのまま連れ去られたらしいこと、被害は午前１０時３０分前後らしいことがわかりました。

開拓民たちは加害グマを追跡しようとしましたが、すでに日は暮れかかり、この日は手の打ちようがありませんでした。現地から一番近い羽幌警察分署の駐在所まで、距離は約１９キロ。役場までは約３０キロあり、通信手段などないなか、緊急事態を告げるには歩いて行くほかありません。開拓民たちは誰を使者とするか話し合い、斉藤石五郎が行くことになりました。石五郎は妻子を比較的安全と思われる川下の明景安太郎の家に避難させ、緊急事態を知らせるために集落を出発しました。

翌１０日午前９時頃から、集落の男たち３０人あまりで捜索隊を結成。連れ去られたマユと加害グマを探すため、クマの足跡をたどって雪深い林内へと入っていきます。すると、１５０メートルほど進んだやや小高い場所にそびえるトドマツの根元あたりが黒く盛り上がっているのを見つけます。近づいていくと突然巨大なクマが一行に襲いかかってきました。急に飛び出てきたクマに捜索隊は慌てふためき、銃を持つ者５人は一斉に発砲しようとしました。しかし普段の雑な扱いのため、発砲できた銃は1丁のみ。捜索隊は一部を除いて逃げ散ります。それでもクマは方向を変え、山の方へと走り去っていきました。その後クマがひそんでいたトドマツの根元辺りを見に行くと、そこにはマユの遺体がありました。

同日夜、最初の襲撃があった太田宅でマユと幹雄の葬儀が行われました。クマを恐れ、参列したのは9人のみ。午後８時３０分頃、葬儀が行われていたまさにその最中、再度ヒグマが乱入してきます。幸い犠牲者は出ず、５０人ほどの救援隊が駆けつけたときには、ヒグマはすでに姿を消した後でした。

この夜、石五郎の妻子は、明景安太郎家へと身を寄せていました。明景家は比較的家が広く、地理的にも安全だと思われていたためです。その家には明景安太郎の妻ヤヨ、その子どもたち5人、石五郎の妻タケとその子どもたち２人、用心のためにと太田家の寄宿人長松要吉、合計１０人がいました（タケは妊娠しており、胎児を含めると11人）。

彼女らは葬儀をしていた太田家に乱入したヒグマの騒ぎを聞きつけ（両家の距離は５００メートルほど）、火を絶やさないようにと薪をくべ続けます。午後８時５０分頃、そこへヒグマが襲撃します。クマはヤヨとその子どもたち、長松要吉、タケとその子どもたちへと次々と襲いかかりました。このとき襲撃された明景家では、タケと胎児、そしてその子どもたち２人、ヤヨの子1人が殺害されました。

９日から10日にかけての事態の情報が北海道庁に届いたのは１２日でした。北海道庁保安課は羽幌警察分署長に討伐隊の組織を指示。１２日夕刻には警察はもとより、小平や羽幌方面からも青年団や消防組、若い農民などが駆けつけて大討伐隊を作り、ヒグマの捕殺をすべく動きます。しかしながら、林野に逃げ隠れするヒグマを見つけることはできません。

なかなかクマを探し出すことができない討伐隊は、前代未聞の策に出ます。クマが獲物に執着する性質を利用するため、遺族の同意を得たうえで、明景家に残された遺体を「餌」としてクマをおびき寄せる作戦に出ることにしたのです。しかしこの作戦も失敗に終わります。クマは姿を現しましたが銃撃隊の射程に入ることなく姿を消してしまいます。

13日の午後8時頃、氷橋で警備についていた討伐隊の一人が、対岸のヤナギの大木の切り株が明らかに1本多く、しかもわずかに動いているように見えることに気づきます。総指揮官の羽幌分署長が人かクマかと叫んで呼びかけるも返答がなく、10数丁の村田銃で発砲。瞬間、黒い塊が雪原を走り去っていきました。

三渓神社　熊害慰霊碑

苫前町ベアーロード看板

クマは負傷していると思われ、翌朝、捜索隊は今度こそはと追跡を開始。鉄砲撃ちの名人と言われる山本兵吉は、討伐隊とは別行動でクマを追い始め、ついにヒグマを発見します。兵吉は日露戦争の戦利品という銃で発砲。一発目は心臓近く、二発目は頭部を貫通し、ともに致命傷となってクマは絶命しました。

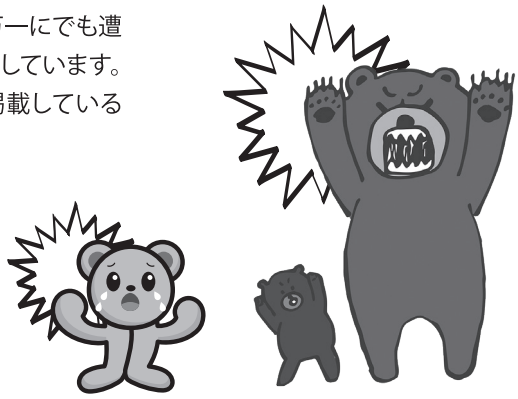
12日から14日の3日間の討伐隊員は官民合わせて延べ６００人、アイヌ犬10数頭、投入された鉄砲は６０丁にのぼりました。

ヒグマは金毛を交えた黒褐色のオスで身の丈２．７メートル、体重３４０kgもありました。推定７、８歳で、袈裟懸けと呼ばれる弓状の白斑があり、体に比べて頭部が異常に大きい特徴的なクマだったと言われます。

5 ヒグマに遭遇してしまったらどうするか

ヒグマに遭遇しないことが一番なのですが、それでもヒグマに万一にでも遭遇してしまった場合の対処法は、様々な公的機関が対処法等を公表しています。

知床財団（https://www.shiretoko.or.jp/）がホームページで掲載している情報がわかりやすいので一部抜粋してご紹介します。



○状況１　距離が離れていた場合（距離１００メートル）

①クマがこちらに気づいていない

気づかれないようにその場を離れましょう。

②クマがこちらに注目or気づいているがこちらを無視している

様子を見ながら、静かにゆっくりと、その場から離れましょう。

③ゆっくりと近づいている

人間だということを知らずに来ている可能性があるので、クマに人間だということを知らせるため、石や倒木などにあがり、大きく腕をふりながら、穏やかに声をかける。

④こちらに気づいていて、ゆっくりと近づいてくる

上記の行動をとっても接近をやめないときは、興味本位または捕食目的で近づいている可能性もあります。５０メートル以内で人を意識しながら接近を続け、逃げ場がない場合、倒木や石の上に立ち、自分を大きく見せ、大きな声と音をたてて威嚇しましょう。クマ撃退スプレーを持っている場合は噴射の準備を、その他、棒など武器になりそうなものを手に取りましょう。

○状況２　突発的な遭遇（距離２０～５０メートル）

①クマがのっそりと立ち上がるorひょっこり出てきた場合

あわてずにゆっくりと両腕を上げて振り、穏やかに話しかけながら、クマとの間に立木などがくるように静かに移動しましょう。

②上記対応をとっても、クマがこちらを無視している場合

クマから目を離さないように、ゆっくりとクマから離れましょう。

③上記対応をとっても、クマが立ち去らない場合

付近を冷静に観察し、ゆっくり離れましょう。急な動きはクマを興奮させるので避けましょう。また、いつまでも動かずにいると、敵対行動ととられることもあります。

○状況３　突発的な遭遇（距離２０メートル以下）

突発的に走って逃げる、大声でわめくような行動は避けましょう。クマが防衛的な攻撃に移る可能性があります。ほとんどの場合、クマの方が全速力で逃げていきます。ヒグマは素早く動くものに反応します。走って逃げると追いかけてくる可能性があります。

○状況４　クマが突進してきたら

突進の多くは、威嚇突進行動です。クマは相手に突進しても途中で立ち止まり、激しく地面を叩くなどして、後退することが多いです。クマとの間に障害物を置くようにしながらゆっくりと後退しましょう。

6 ヒグマとの共生

札幌市は、「さっぽろヒグマ基本計画２０２３」を策定し、人とヒグマとの共生のため、人とヒグマの「すみ分け」をはかることを目標として、ヒグマの侵入抑制策や出没対応などを強化することにしています。

そのための考え方として、「ゾーニング管理」という考え方のもとに、「市街地ゾーン（ヒグマが入ってきてはいけない場所）」、「市街地周辺ゾーン（ヒグマが入ってくるのを防ぐ場所）」、「都市近郊林ゾーン（ヒグマが住み着くのを防ぐ場所）」、「森林ゾーン（ヒグマが暮らしている場所）」というように、４つの地域に分けています。

それぞれのゾーン区分ごとに対策をたて、ヒグマの誘引物対策の強化、ＩＣＴによるヒグマ対策管理、万一ヒグマが出没してしまったときの体制強化などを図っています。

当然のことですが、ヒグマの被害を防ぐためには行政だけではなく、地域に住む我々自身の意識も問われてきます。キャンプなどでのレジャーではゴミを放置しない、山に入るときはヒグマ対策を心がけるなど、注意しなければいけないことが多くあります。人に危害を加えそうな状況や危害を加えてしまったクマの駆除は当然ですが、クマにそのような行動をとらせないため、我々人間の行動も大切なことです。

ゾーニング管理とは

ヒグマに対する考え方と対策の方針は、場所ごとに異なります。
そこで、市域をいくつかの地域(ゾーン)に分けることで、各ゾーンに適したヒグマ対策を進めていくという考えが「ゾーニング管理」です。

ゾーニング管理図（さっぽろヒグマ基本計画２０２３資料より）

基本行動方針表

ゾーン	レベル Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
市街地ゾーン	●捕獲(駆除) ●追払い・見回り ●防除対策	●捕獲(駆除) ●追払い・見回り ●防除対策	●捕獲(駆除)	●捕獲(駆除)
市街地周辺ゾーン	●防除対策 ●追払い・見回り ●捕獲(駆除)	●捕獲(駆除) ●追払い・見回り ●防除対策	●捕獲(駆除) ●追払い・見回り ●防除対策	●捕獲(駆除)
都市近郊林ゾーン	●防除対策 ●追払い・見回り ●捕獲(駆除)	●防除対策 ●追払い・見回り ●捕獲(駆除)	●捕獲(駆除) ●追払い・見回り ●防除対策	●捕獲(駆除)
森林ゾーン		●防除対策 ●追払い・見回り ●捕獲(駆除)	●防除対策 ●追払い・見回り ●捕獲(駆除)	●捕獲(駆除)

基本行動方針（さっぽろヒグマ基本計画２０２３資料より）

参考書籍
「慟哭の谷　北海道三毛別・史上最悪のヒグマ襲撃事件」　木村盛武　文藝春秋
「ヒグマ大全」　門崎充昭　北海道新聞社
「神々の復讐」　中山茂大　講談社
「ヒグマは見ている　道新クマ担記者が追う」　内山岳志／北海道新聞社編　北海道新聞社
「クマにあったらどうするか」　姉崎等　筑摩書房
「羆嵐」　吉村昭　新潮社
「人を襲うクマ　遭遇事例とその生態」　羽根田治　山と渓谷社
「日本クマ事件簿」　三才ブックス